

大豆管理情報（第3号）

令和8年8月3日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過（図1）

（1）気温

5月下旬の平均気温は、21.8℃（対平年差+2.8℃）と平年に比べかなり高かった。

6月の平均気温は、22.4℃（同+1.0℃）と平年に比べ高かった。

7月の平均気温は27.6℃（同+2.1℃）と平年に比べかなり高かった。

（2）降水量

5月下旬の降水量は、35.5mm（対平年比98%）と平年並であった。

6月の降水量は、129.5mm（同75%）と平年並であった。

7月の降水量は、166.5mm（同68%）と平年に比べ少なかった。

梅雨入りは、6月20日（前年5月22日、平年6月11日）と平年に比べ9日遅かった。

（3）全天日射量

5月下旬の平均全天日射量は、18.4MJ/m²/日（対平年比96%）と平年並であった。

6月の平均全天日射量は、19.0MJ/m²/日（同110%）と平年に比べ多かった。

7月の平均全天日射量は、19.3MJ/m²/日（同116%）と平年に比べ多かった。

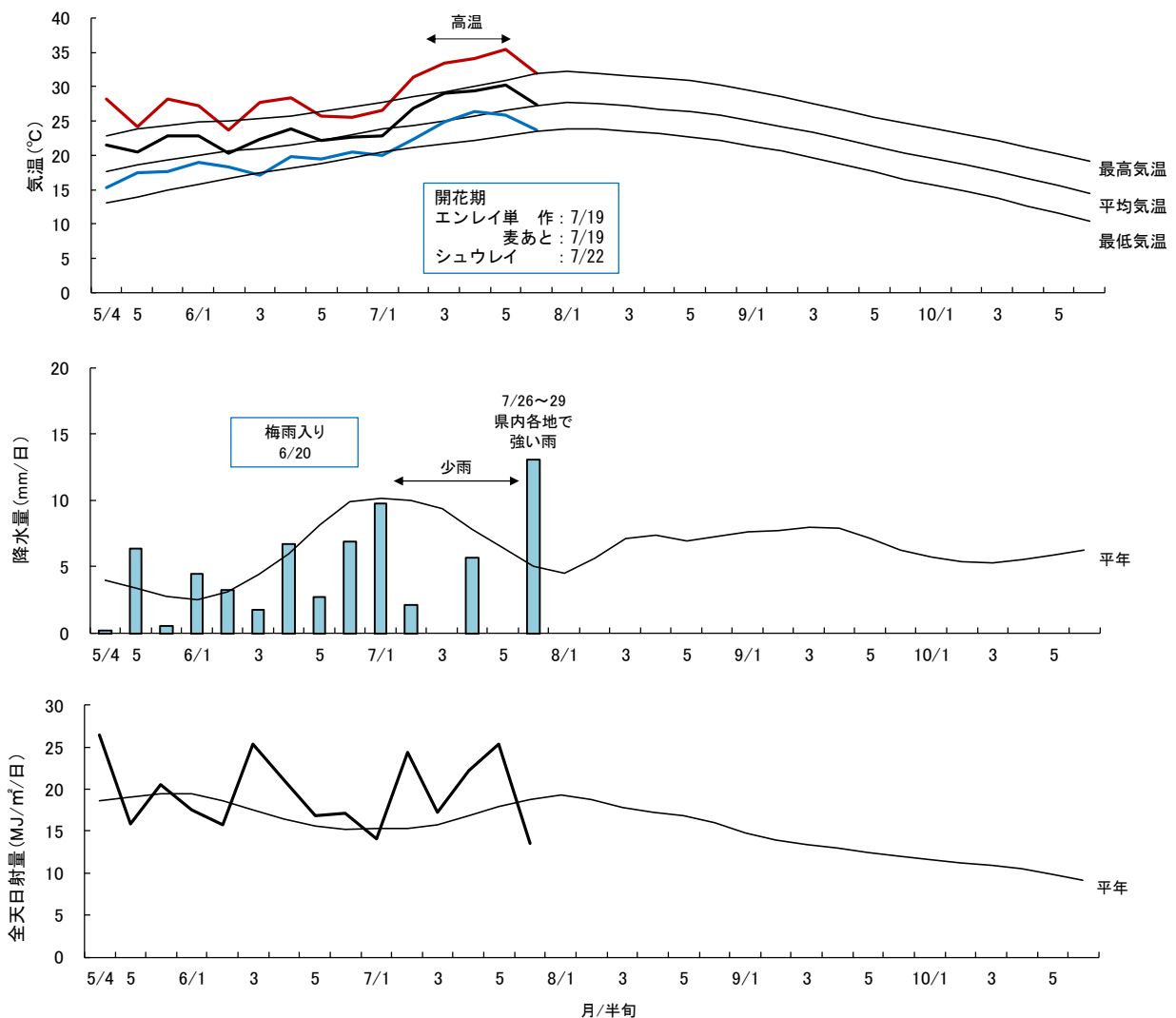


図1 令和8年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育経過（生育観測ほデータ）

（１）エンレイ（単作）

- ・近年に比べ、主茎長は並、本葉葉数は0.3葉少なく、一次分枝数は0.1本少なくなっている。
- ・開花期は、近年に比べ1日遅い7月19日となった。

（２）エンレイ（麦あと）

- ・近年に比べ、主茎長は並、本葉葉数は0.3葉多く、一次分枝数は0.9本少なくなっている。
- ・開花期は、近年に比べ1日早い7月19日となった。

（３）シュウレイ

- ・平年に比べ、主茎長は長く、本葉葉数は0.3葉多く、一次分枝数は0.6本少なくなっている。
- ・開花期は、平年並の7月22日となった。

表1 大豆生育観測ほ調査結果（8月3日調査）

品種	年次	播種日 (月/日)	栽植本数 (本/㎡)	主茎長 (cm)	本葉葉数 (葉)	一次分枝数 (本)	開花期 (月/日)
エンレイ	単作	R8 6月5日	16.7	70.0	12.2	1.7	7月19日
		R7 6月1日	16.7	71.7	12.6	1.5	7月17日
		近年 6月2日	16.7	74.0	12.5	1.8	7月18日
		近年比・差	3	100	-0.3	-0.1	1
	麦あと	R8 6月4日	17.2	71.7	12.5	1.2	7月19日
		R7 6月7日	16.1	63.8	12.1	2.5	7月23日
		近年 6月5日	16.6	69.6	12.2	2.1	7月20日
		近年比・差	-1	103	0.3	-0.9	-1
シュウレイ		R8 6月7日	16.4	69.1	11.7	2.1	7月22日
		R7 6月9日	11.7	52.2	10.9	2.2	7月24日
		平年 6月6日	14.8	59.9	11.4	2.7	7月22日
		平年比・差	1	111	0.3	-0.6	0

注1) 調査ほ場数: エンレイ(単作5、麦あと3)、シュウレイ(単作2、麦あと1)

注2) 平年値はH28～R7、近年値はR2～7

注3) 平年比(近年比): 苗立本数・主茎長、平年差(近年差): 播種日・本葉葉数・一次分枝数

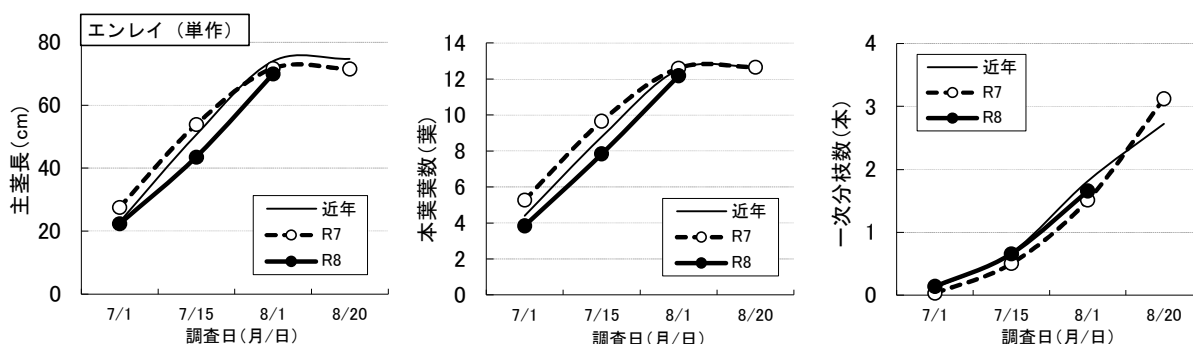


図2 単作エンレイの生育の推移

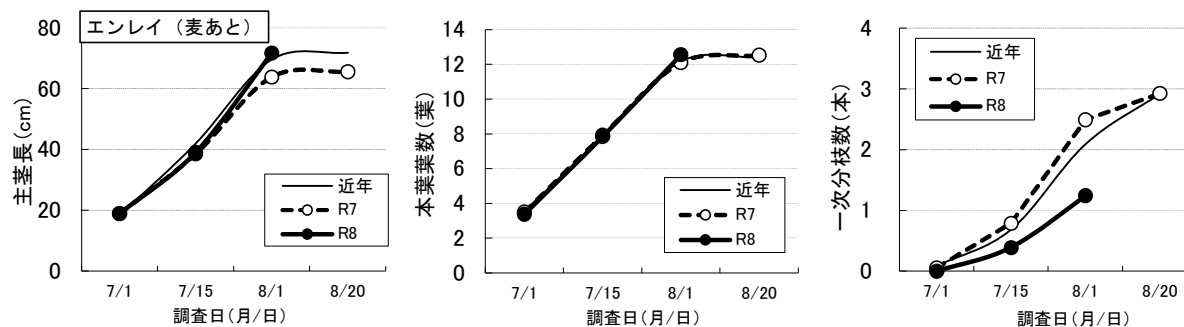


図3 麦あとエンレイの生育の推移

3 当面の技術対策

- ・今後も高温が予報されているため、開花期頃から9月上旬頃まで晴天が3日以上続くと見込まれる場合は、降雨に頼らず積極的に畦間かん水を実施する。
- ・畦間かん水の入排水や降雨後の排水を速やかに行うため、ほ場内の水が停滞しないように排水口の点検や溝の手直し等を行い、排水対策を徹底する。
- ・紫斑病及びカメムシ類の2回の基本防除を徹底する。

(1) 排水対策

- ・畦間かん水の入排水や降雨後の排水を速やかに行うため、溝の手直しや連結、排水溝の掘り下げを確実に実施する。

畦間かん水時の速やかな入排水や、大雨に備えて、溝や排水溝の手直しを行いましょう。

(2) 畦間かん水

- ・畦間かん水は、収量の確保（英数確保・百粒重の増加）、品質の向上（しわ粒や莢ずれ粒の発生軽減）、青立ち防止につながることから、開花期頃から9月上旬頃まで晴天が3日以上続くと見込まれる場合は、降雨に頼らず積極的に実施する。
- ・かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら、水口をしっかりと止め速やかに排水する。
- ・用水が下流域まで行き渡るように、地域での計画的かつ効率的な水利用に努める。



図4 排水促進に向けた畦間と額縁排水溝の連結

【畦間かん水の効果】

1 収量の確保

- (1) 英数の確保: 落花・落莢の防止（青立ちの発生防止）
- (2) 百粒重の増加: 根の養水分吸収量の増加、光合成の促進
根粒による窒素固定能の維持

2 品質の向上

- : ちりめんじわ粒の発生防止
- 莢ずれ粒（高温に伴う物理的損傷）の発生防止



水不足で落花・落莢し英数が少ない

英が少なく青立ち



英伸長期



成熟期

図5 開花期以降の水不足により落花・落莢した大豆（R5 現地ほ場）

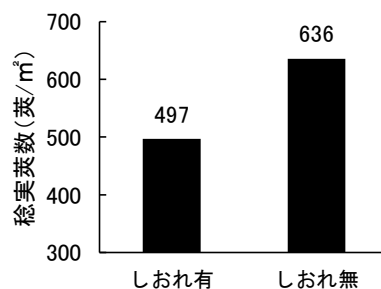


図6 開花期以降の水不足が英数に及ぼす影響（R5 現地ほ場、成熟期調査）

注）開花期翌日～8月下旬までの降水量：37 mm

(3) 病虫害防除

ア 基本防除

- ・カメムシ類と紫斑病に対して、2回の基本防除を徹底する。防除時期は、開花期が7月4～5半旬頃の場合、8月2～3半旬頃と4～5半旬頃である。
- ・薬剤は、同一系統の薬剤の連用は避け、莢や茎葉に薬剤が十分付着するよう散布する。

イ 今後注意が必要な病害虫

(ア) 吸実性カメムシ類

- ・現在、ほ場内で多く確認されており（大豆病虫害情報第3号）、今後も多発が懸念される。
- ・莢伸長期の加害による落莢、子実肥大期の加害による子実肥大停止粒等の発生は、青立ちの発生を助長するため、基本防除1回目（莢伸長期）と2回目（子実肥大期）の防除を遅れずに実施する。
- ・山際等の常発地や多発が懸念されるほ場では、発生状況に応じて9月上旬に追加防除を行う。



図7 吸実性カメムシ類



図8 カメムシによる被害粒

(イ) ハダニ類（図9）

- ・現在、一部のほ場で発生が確認されている。
- ・高温・少雨で多発する。多発すると、小粒化し減収の要因となる。
- ・8月上～中旬にハダニによる葉の黄化がほ場の1割程度みられたら、速やかに防除を行う。なお、防除の際は、葉の裏に薬剤が十分かかるように散布する。

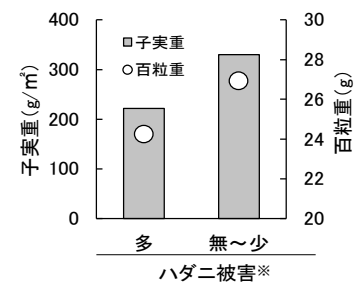


図9 ハダニの被害が子実重と百粒重に及ぼす影響 (R5 現地ほ場)

※9月上旬の被害、多：ハダニによる葉の黄化が株の80%以上、無～少：10%以下

(ウ) 葉焼病（図10）

- ・強風雨で蔓延し、多発すると収量、品質が低下する。
- ・蔓延防止には発生初期の防除が有効であるため、ほ場を巡回し、発生を確認した場合は速やかに「Zボルドー」等で防除する。
- ・「シュウレイ」は発病しやすいため、予防的に防除を行う。



図10 葉焼病

	7月 下旬	8月 上旬	8月 中旬	8月 下旬	9月 上旬
生育 ステージ	開花期	莢伸長期		子実肥大期	
基本防除		【1回目】 紫斑病 カメムシ類		【2回目】 紫斑病 カメムシ類	
随時防除	葉焼病	ウコンノメイガ	ハダニ類	ハスモンヨトウ	カメムシ類

図11 大豆の病虫害防除時期（例：6月上旬播種）

山際等の常発地域や2回の基本防除後に発生が多くみられる場合は、9月上旬に追加防除を実施する

(4) 雑草対策

- ・ほ場内の大型雑草や難防除雑草は、雑草が結実する前に防除（手取り、除草剤塗布、地際からの刈取り等）を徹底する。特に、帰化アサガオ類やイヌホオズキ類は水田周辺等も含め防除するとともに、再度発生することがあるため、継続的に防除する。